



# 『広畑』をたずねて

旧広村は姫路の西部を流れる夢前川下流の西岸に位置し、広畑及び小坂の両大字に分れる。この辺り一帯の土地は、夢前川の沖積作用によって発達した土地である。

広畑という地名の由来は、一帯が広々とした畑が広がっていたことから名付けられたといわれている。この辺り一帯にはかつて条里制がひかれ、現在も「四ノ坪」「五ノ坪」などその遺称が小字として残っている。

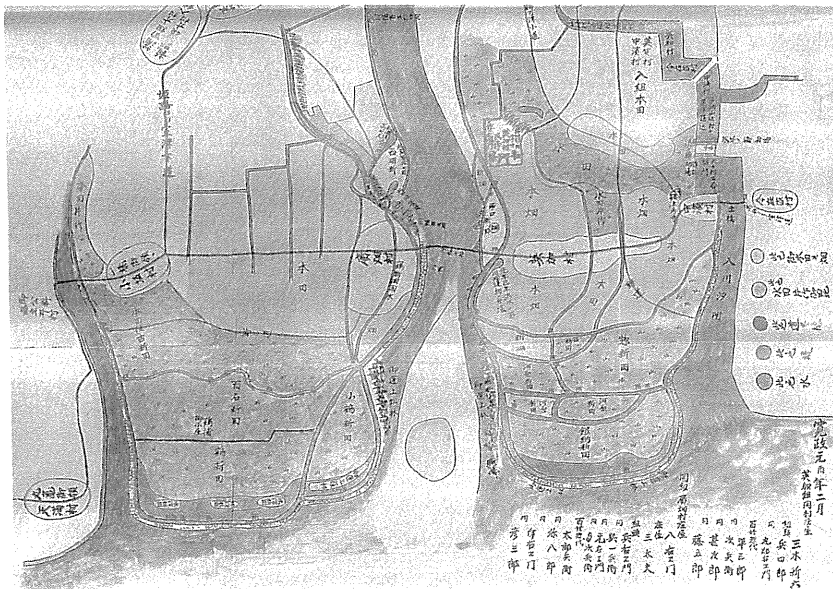
小坂という地名の由来は、高尾という小山があり、その東西に集落があって小坂口と呼称したことから小坂と呼ばれるようになった（『飾磨郡誌』）など諸説があるが詳しいことはわからない。

往昔は『播磨風土記』に「英賀と稱ふは、伊和の大神のみ子、阿賀比古・阿賀比売ニはしらの神、ここに在す。故、神のみ名により因て、里の名と為す」と記されている「英賀の里」に属していた。中世の広村の様子を具体的に知ることはできないが、夢前川を挟んで東には商業活動や本徳寺の門前町として栄えた英賀があり、その支配下に置かれていたと思われる。広畑には天正年間以前、赤松氏の幕下の広畑構居が置かれていた。

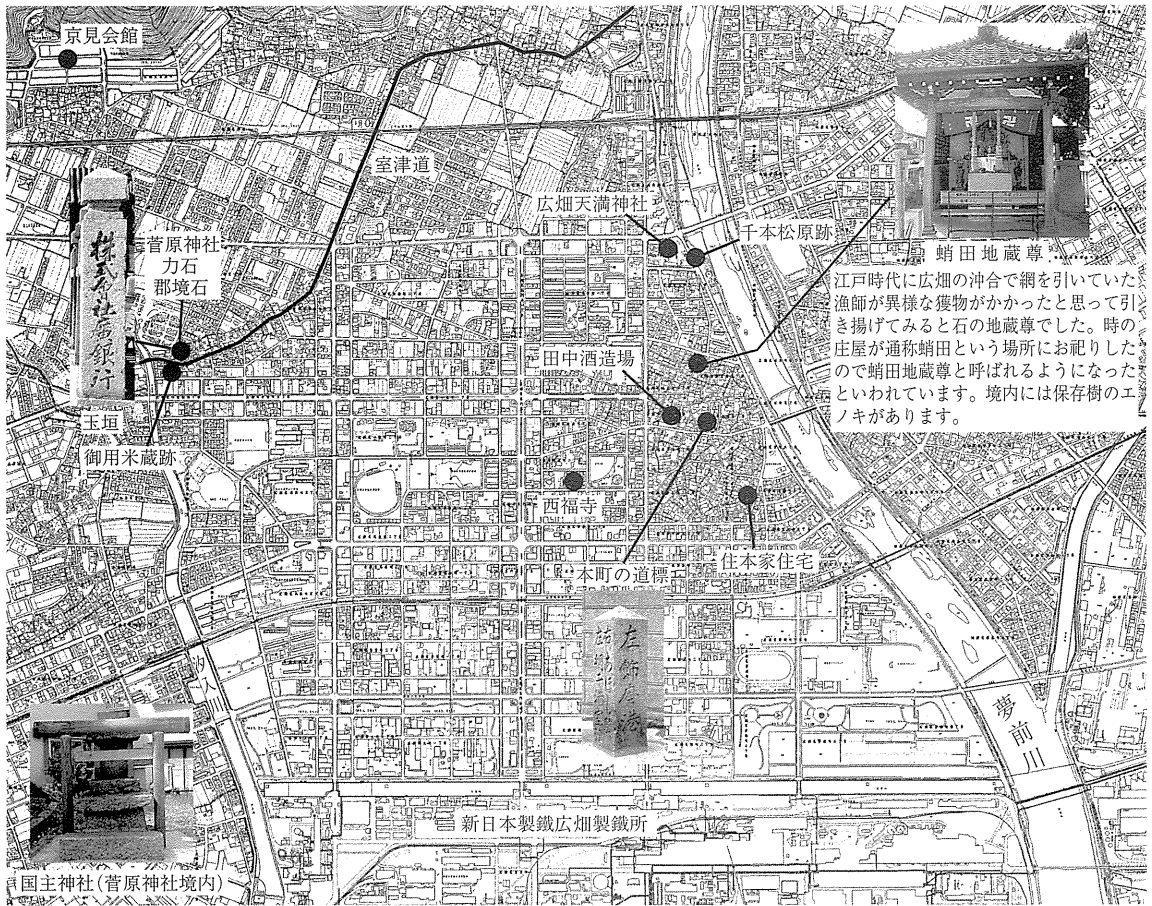
江戸時代に入ると広畑は姫路藩領になり、村高は「正保郷帳」では1,095石余り、「天保郷帳」では2,394石余り、「旧高旧領」では2,891石余りと高い石高を示している。また江戸時代を中心に壱町新田・前新田・大新田・西新田・東町新田・鶴新田・小鶴新田など新田開発が盛んに行われ耕地面積が大きく伸びた。一方の小坂は、慶長・元和年間頃は姫路藩領、寛永3年（1626）には龍野藩領、同9年（1632）には幕府領、同14年（1637）には再び龍野藩領、万治元年（1658）には幕府領、延享元年（1744）には出羽国山形藩領、同3年（1746）からは一橋家領というように度々支配者が変わっている。村高は「正保郷帳」では325石余り、「天保郷帳」「旧高旧領」では390石余りとなっている。

明治22年（1889）、町村制施行にあたって両村が合併して高濱村となる。明治29年（1896）4月には飾東郡と飾西郡が合併して飾磨郡が成立するが、一郡内に高濱村が2カ所できてしまうため同年3月5日に広村と改称する。昭和16年（1941）4月には八幡村・広村が合併し、広畑町となる。昭和21年（1946）には姫路市と合併。広畑区を冠称して同市の大字に継承され現在にいたる。

昭和12年（1937）に日本製鐵第四次拡張計画により、新鶴新田に広畑製鐵所建設を決定。昭和13年（1938）12月には広栄橋から下流1,650mを河口で東に500m移動させる夢前川付け替え工事が始まり、同14年（1939）には第1高炉に火入れされ操業が開始された。以後、広畑は製鐵所と共に発展を遂げていく。同21年（1946）には富士製鐵広畑工場となり、現在は新日本製鐵に復帰している。



寛政元年英加村廣畑村新田図  
（日ノ本学園短期大学図書館所蔵）



**室津道** 姫路城下より千代田町、西延末、町坪、苦編、付城を通り、山崎で夢前川を渡り才、小坂、西土井、田井、宮内、津市場を通過して御津町に入り、姫路藩の飛地で古代より瀬戸内海の海上交通の重要な海駅として繁栄した室津に至る街道。かつて参勤交代の大名行列もこの街道を利用したが、次第に山陽道を通るようになった。しかし、室津に停泊する朝鮮使節や西国大名の応接に赴く役人たちが物資の往来なども激しかったことであろう。

(文化財見学シリーズ11参照)



▲室津道 (小坂)

**住本家住宅** 建築年代は明治中期。主屋は南の正面側を「表」、北の背面側を「裏」、東の土間側を「下手」、西の座敷側を「上手」と呼ぶ。主屋は2階建つし付き、屋根は本瓦葺で西側が入母屋造であるのに対して東側は切妻造で元の納屋の屋根が続く。土間の上には越屋根が架けられ、しつ2階部分は漆喰で塗籠られており、町家風の外観を呈している。平成8年8月5日に姫路市都市景観重要建築物等に指定された。



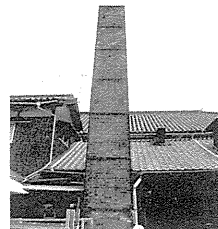
▲住本家住宅 (末広町)

**本町の道標** J A 姫路広畑支店の北の道路端に高さ約90cm、幅約26cmの花崗岩製の道標がある。背面に「明治十七年五月 施主瀬尾孫次郎」、正面には「左 網干港室津 右 あぼし駅」、側面には大きく「左 飾磨港」と刻まれている。

**田中酒造場** 田中家は天保6年(1835)に造酒屋を始めたと伝え、過去帳で享和2年(1802)まで遡ることができ、その歴史そのままに各時代の建物をよく残している。建物は母屋・増築部・奥座敷・店・酒蔵2棟・内蔵からなっている。主屋は木造2階建つし付、切妻造、棧瓦葺、19世紀中期に建てられ、明治後期に増改築されている。酒蔵2棟は、木造2階建、半切妻造、本瓦葺で東酒蔵は明治2年(1869)、西酒蔵は明治23年(1890)に建てられたものである。店は木造2階建、入母屋造、棧瓦葺で外部は黒漆喰で塗り籠められ落ちついた雰囲気をかもし出している。平成8年8月5日に姫路市都市景観重要建築物等に指定された。



▲田中酒造場の外観(本町)



▲酒蔵と煉瓦造の煙突

**広畑天満神社** 祭神は菅原大神・蛭子大神・春日大神の三神を祀る。広畑天満神社の源祀は、地元の口碑によれば霊亀年間(715~716)に奉祀された広辻神社に始まるという。『飾磨郡誌』によれば京都北野神社の分霊を一旦母社の英賀神社に勧請し、明治2年9月に社殿を創建して当社に奉遷し、同時に古来より同村に鎮座していた蛭子大神・春日大神を合祀して一社となったので英賀神社の氏子を離れたという。



▲広畑天満神社

**菅原神社** 小坂の氏神で祭神は菅原大神。創祀の年代は不明。

『飾磨郡誌』によれば当社は別名荒木天神ともいう。伝承によれば菅公が左遷で九州に流される途中、天候が急に悪くなり風波荒く船が進まず余儀なく英賀の田井ガ浜に上陸した時、自作の木像が「我久」(高浜の浜辺の字名)という所に流れついていたのを祀ったことに始まると伝えている。現社殿は昭和17年に再建されたものである。境内の北東隅にある小石祠は、古くから農耕の神として祀られていた国主神社だとされる。非常の際には石祠が広がり、氏子が避難できるという伝説が残っている。境内には寛政7年(1795)正月及び文政12年(1829)・安政7年(1860)に建立された常夜灯がある。



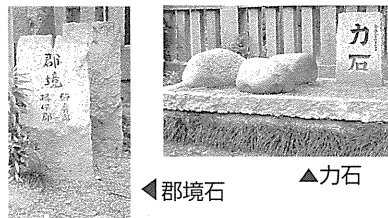
▲菅原神社

**菅原神社の力石** 境内には3個の力石が保管され、「力石」と刻まれた石碑が建てられている。力石は、農作や凶作を占う「石占」から派生したという説もあるが、農村では米俵を、漁村や港湾付近の村々では醤油、油及び酒樽などの運搬に従事する労働者の間から発生したものである。江戸時代から昭和初期まで全国津々浦々の集落で「力石」を用いて力くらべが行われていた。



▲常夜灯(左 寛政7年・右 安政7年)

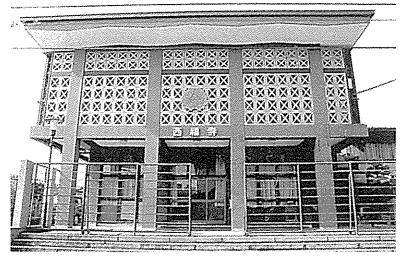
**郡境石** 菅原神社の境内に保存されている。この石は汐入川の改修の際に小坂橋附近の川の中から発見されたものである。2枚の長方形の板石からなり、先端部をV字状にくぼめ郡境を見通せるようになっている。板石の表には「郡境」と大きく彫られ、その下に「飾磨郡」「揖保郡」と刻まれている。



◀郡境石

▲力石

**西福寺** 寛正5年(1464)證雲によって開基。当時は真言宗で高濱にあったという。弘治年間(1555~58)に3世正顕によって本町に寺が移されたという。天正の初めに6世元雄によって真宗に改宗し英賀本徳寺に属する。その後、寛文8年(1668)、亀山本徳寺貞照院良春尼に従って船場本徳寺に属する。享保12年(1727)に失火のために本堂・庫裏を全焼。翌13年再建。昭和38年に現在地に移された。

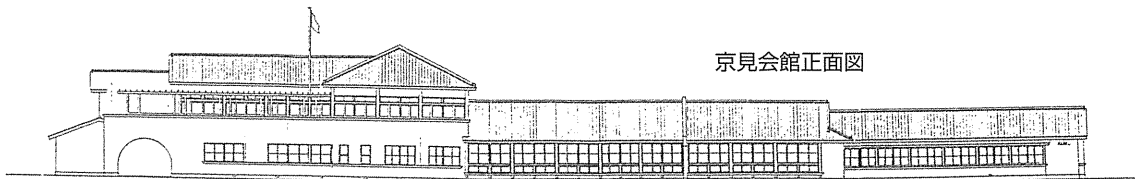


▲西福寺

**京見会館** 京見会館は昭和16年(1941)、広畑製鐵所の迎賓館として建設されたものである。設計者は明治村にその姿を止めている「旧帝国ホテル」等の建築で名高い、フランク・ロイド・ライトの一番弟子遠藤 新が設計。大型客船のキャビンを模して造られたというリビングルームや広い洋風のダイニングルームなど和洋室が配置されている。広畑製鐵所の歴史と共に歩んできた建物で、戦火を免れ、戦後の混乱にも耐えて、建築当初の面影をそのままとどめ、さりとした上品さと、安堵感が漂う建物である。



▲京見会館(外観)



京見会館正面図

**御用米蔵跡** 室津道の南、汐入川の東堤に建てられた2棟の土蔵で、明治維新まで飾磨郡内における一橋領(小坂・則直・青山・寺・町田)の年貢2,079石余りをここに納めた。その後、小舟で網干に運び藩吏の量目検査を受けて大阪難波や江戸浅草へ回送された。



▲京見会館(内部)

**名跡千本松原跡** 室津道の南の夢前川西堤上に植えられていた松原跡。枝振りのよい松が清流に映え昔は月見の名所であったという。その後、切られたり広畑天満神社創建の用材に用いられた。昭和の初めごろには5本の松が残っていたという。

**新田開発** 江戸後期になると豪商などによって海岸地帯で干拓開発が盛んに行われるようになった。広畑の南の海岸も古くから干拓が行われている。「寛政元年英加村廣畑村新田図」によれば小坂村・広畑村の南に「本田役古新田」「百石新田」「鶴新田」「小鶴新田」があり、さらに百石新田の中に「鶴捕御小屋」と書かれている。天保7年(1836)11月には印南郡砂部村金沢九郎兵衛・加古郡高砂船頭町新屋嘉兵衛の願いによって鶴新田地先96町7反余りの干拓に着手し、天保14年(1843)に新鶴新田が完成している。



▲御用米蔵跡

**広畑の構居** 構居の確かな位置は分からないが、『播磨鑑』によれば領主は小松原の支流英賀伝十郎尚時、赤松氏の幕下であったといわれている。



千本松原跡